芸文協だより

◆習志野市芸術文化協会／広報◆

題字　吉原聚堂

第58号

令和4年9月25日

発行者
習志野市芸術文化協会
会　長　中谷　時男
編集長　小笠原仁仙

第38回芸術祭アロハフェスティバルin習志野

芸術文化を想う

習志野市芸術文化協会副会長
小笠原　仁仙

コロナウイルスとの闘いも三年になり、暗いトンネルの中一筋の光を頼りに文化の灯火を守るを目標に、幾多の社会情勢の変化の中でも、文化は継承され、芸術性を高めてまいりました。

現在コロナウイルス第七波の波に翻弄されながらも大勢の仲間達と、コロナウイルス感染拡大が収束した後の、芸術文化活動に想い巡らせ前向きに歩んでおります。

花は生命を持ち、儚さ、尊さ、美しさ、癒しなど様々なものを私達にもたらすものであり、辛い状況の中でも、多くの人々を励まし、魅了し続けています。

平成二十三年東日本巨大地震のおり瓦礫の中、小さな屋台で花を売る人、花を求める人々は悲しい笑顔でした。でも私には明るい未来を見つめている笑顔に、画面を通し感じられ心からのエールを送った事を思い出されます。

今は荒れ果てた地に、花が咲き　草木が茂っていると友人よりの便り、その中に伝統文化子供教室を開講できたとの嬉しい知らせがありました。

文化の灯が消えること無く受け継がれていると実感でき、心躍る思いでした。

今だからこそ、原点に立ち返り、花の心、そして文化を愛した、先達の心に寄り添い季節の移ろいを見つめ、感じる心を大切に、芸術文化協会の一員として、次世代へと、この文化を守り紡いで行くことができれば幸いと思っております。